

活動理論とその残された課題

Activity theory and its unresolved problems

高取憲一郎 TAKATORI Kenichiro (教授 発達科学講座)

キーワード：活動理論, ルリヤ, 戸坂潤

Keywords : activity theory, Luria, Tosaka Jun

(注)本稿は、2012年度放送大学鳥取学習センター講義「社会と心」(2012年5月12日,13日)および2012年度免許更新講習講義「ヴィゴツキー心理学の展開」(2012年11月11日)の講義草稿を基にして大幅な改編,補筆をおこなったものである。

1 はじめに

「社会と心」という題目で本講義をすすめるわけですが,私の場合は社会によって心が作られるという視点からこのテーマに取り組んでいるということを最初に申し上げておきたいと思います。そのとき,心理学のいろいろな考え方の中で,私自身が手がかりとしてきたものが二つあります。一つは,ソビエト連邦(今となっては存在しない国となってしまいましたが)の心理学者ヴィゴツキーの心理学であり,もう一つはスイスの心理学者ピアジェの心理学です。私は,この二つの学派の研究に基づいて,心は社会によって形成されるという考えを現在まで深めてきました。その理由は,ヴィゴツキーの場合は,活動,正確には労働と言ったほうが良いと思いますが,を意識の発生と展開の基盤としていること,ピアジェの場合は同化・調節・均衡という主体と外界との物質代謝を意識の発生と展開の基盤としていることです。このヴィゴツキーの活動とピアジェの同化・調節・均衡という二つの概念は実は同じものであると私は考えています。労働とは,主体が外界に働きかけると同時に,外界からも働きかけられる,その作用と反作用から成り立っているプロセスだからです。労働の過程は同化と調節であると言い換えてもよろしいと思うからです。

2 前期活動理論

活動理論を前期とか後期とかに分けるとすることは,これまでおこなわれていないのですが,私は,前期活動理論をソビエト心理学という舞台における研究の発展,後期活動理論をアメリカおよびヨーロッパへの活動理論の拡散・展開というふうに区分できるのではないかと考えています。

前期の活動理論を最もよく表している例として,わが国ではほとんど紹介されていないのですが,不随意的記憶という研究をまず見ておきたいと思います。この研究は,当時のソ連以外の欧米の心理学では,偶発学習というテーマのもとに研究されてきたものとはほぼ同じものですが,活動という概念

のもとに明瞭な問題意識をもって研究しているか否かという点で大きな違いがあります。ソ連では,スミルノフとズインチェンコを中心に研究されてきました。

スミルノフとズインチェンコによれば(Smirnov, A. A. & Zinchenko, P. I. Problems in the psychology of memory. In M. Cole & I. Meltzman (Eds.) A handbook of contemporary soviet psychology. Basic Books, 1969, 452-502.),不随意的記憶を生じさせるものは,主体の対象への働きかけである。すなわち,その働きかけのなかで,主体は対象のイメージを形成し,それが基礎となって不随意的記憶が生ずると考えるのです。要するに,不随意的記憶は,対象の側からの主体への働きかけではなくて,主体の側からの対象への働きかけの結果として生ずるものとして理解されなくてはならないということです。

そのとき,二つの種類の不随意的記憶が存在します。一つは,目標志向的活動の産物としての不随意的記憶,すなわち活動の目標である図刺激に向けられた活動の中で生ずる記憶です。他の一つは,図刺激ではなく地刺激により生じさせられる記憶,すなわち,偶然的志向の産物としての記憶であり,いわゆる偶発学習の産物としての記憶です。スミルノフたちは,前者の目標志向的活動の産物としての不随意的記憶こそが,動物と人間の生活において重要な機能を果たしていると考えています。

具体的な研究としては,スミルノフたちのおこなった不随意的記憶の実験(Smirnov, A. A. Problems of the psychology of memory. Plenum Press, 1973)があります。彼らの見解は,記憶は活動のライン上で生起するという考えです。実際に彼らがおこなったのは,研究所の研究員が自宅から研究所まで朝,出勤してくるときの様子を研究所に到着した後で思い出させるというものでした。あらかじめ,記憶しておけと言っておかないで,到着後,突然,思い出すように言われる。その結果は,想起されたのは,自宅から研究所まで行くという活動のライン上に沿って,見た事,聞いたこと,考えたことなどが思い出されるという結果でした。

もう一つの実験は,図刺激と地刺激を用いた実験の結果です。15枚のカードには,それぞれ中央には絵が描かれていて右端には数字が記入してある。実験Iでは,この15枚のカードを描かれている絵にもとづいていくつかのグループに分類させる。その後で,カードに描かれている絵と数字を再生させる。この場合は,絵が活動の対象あるいは目標(すなわち図刺激)となるために,絵の再生のほうが地刺激にしかすぎ

ない数字の再生よりもよい。実験Ⅱでは、数字が上昇系列をつくるようにカードを並べさせる。その後で、カードに描かれている絵と数字を再生させる。この場合は、数字が図刺激となり絵が地刺激となるために、数字の再生のほうがよい。

以上の例は、記憶が活動に付随して生起していることに注目したものであり、活動を基底として、その上部構造として心理過程が生起するということを説明しようとしているのです。

もう一つの例も紹介しておきましょう。それは、レオンチェフがおこなった媒介的記憶と媒介的注意の実験です。この二つの実験は、人間の活動を考えるときに、われわれは外の世界に対して道具という媒介物を介して働きかけるという重要な特徴を持っているわけですが、それを心理学の研究の中に取り入れたという点にあります。人間は、媒介物を人間と外界との間に挿入することによって、人間の身体だけの自然力ではできないことをおこなっています。人間の活動はこの媒介物という道具が介在することによってより効率的になったのです。この道具から、機械が発達し、それが結果的には人間の文明の飛躍的な発展へとつながっていったのです。

まず、媒介的記憶の実験（レオンチェフ「記録の高次形態の発達」（レオンチェフ『子どもの精神発達』松野豊・西牟田久雄（訳）明治図書、1967年所収、122-162頁。）ですが、幼児から大人までの被験者に2シリーズの記憶実験をおこなっています。第1シリーズは、15個の単語を聞かせてそれをただ記憶させるだけである。第2シリーズは、やはり15個の単語を記憶させるのだが、被験者は目の前に置いてある30枚の絵カードの中から、それぞれの単語を記憶するために役立つと思われる絵カードを計15枚選んで、再生するときその選んだ絵カードを見ながら、それを外的補助物として利用しながら単語を思い出します。

第1シリーズ（レオンチェフは直接的記憶と呼んでいる）と第2シリーズ（間接的記憶あるいは媒介的記憶）の差は、4-5歳児では小さく、6-7歳児以上で大きくなり、専門学校生ではまた差が小さくなっていることが特徴です。これを、レオンチェフは次のように解釈しました。4-5歳児ではまだ外的補助手段であるカードが使えない。6-7歳児以上ではそれが使え始めるために、再生数が第2シリーズで大きく増加する。しかし、専門学校生の段階になると、外的補助手段が内化されて、内部に外的補助手段が作り上げられているために、カードを使用することの効果がそれほど現われないう。このレオンチェフの間接的記憶（あるいは媒介的記憶）の実験は、内化という概念の証明としてよく引き合いに出されるものです。

媒介的注意の実験（Vygotsky, L. S. Mastery of memory and thinking. In Vygotsky, L. S. Mind in society. Harvard University Press, 1978, 38-51.）は、ヨーロッパで「禁じられた色ゲーム」（forbidden colors game）という名前です。このゲームのルールは、二つあります。一つは、言うてはならない色の名前が二つ、あらかじめ決められていること。もう一

つは、一回答えた色の名前は二回目は使ってはならないということ。そして、18個の質問が与えられます。たとえば、①友達にいますか？ ②あなたのシャツは何色ですか？ ③汽車に乗ったことがありますか？ ④汽車の色は何色ですか？などの質問である。この場合の禁じられている色は緑と黄色であるとしています。

このような問いに対して、第1シリーズの場合は外的な補助手段を用いないでただ答えるだけです。一方、第2シリーズでは、被験者の前に9枚の色カード（黒、白、赤、青、黄、緑、ライラック、茶、灰）が横一列に置かれていて、被験者はこれらの色カードを利用しながら質問に答えるようにと教示されます。

結果は、先の記憶の実験の結果と同様に、就学前の5-6歳児では、カードを使用する効果が現われていないのですが、それ以上の年齢の子供においてはカードを使用する効果が顕著になり、大人ではまた効果が減少します。この結果も、レオンチェフは内化理論を証明するものとして記憶の場合と同様に解釈しています。

3 後期活動理論

3-1 コミュニケーション研究を媒介とした活動理論の広がり

活動理論がソ連から西側世界へと広く普及していくきっかけを作ったのは、活動理論とコミュニケーション研究との出会いであったのではないかと、最近、考えるようになりました。その際に、大きな役割を果たしたのがロモフによるコミュニケーションと認識過程の研究であったと思います（ロモフ「一般心理学の問題としてのコミュニケーション」および「心理過程とコミュニケーション」『ソビエト心理学研究』24号、1975年、23-37頁。）。

ロモフは、視覚的探索課題、空間表象の形成課題、詩の記憶再生課題、の三つの実験をおこなって次のような見解を導き出しています。個人的活動は共同的（集团的）活動の派生物であり、従来おこなわれてきたように、心理過程を対象的活動との関連のみで研究するのは片手落ちである。そして、コミュニケーションの役割は、第一に、個人的経験の限界を克服することであり、第二に、コミュニケーションの過程において伝達される情報は、つくられ、発展させられ、より正確になるというように、コミュニケーションそのものが絶えざる認識の過程であり、第三に、コミュニケーションは共同的活動を遂行する諸個人の共同性の形成を保障する。実験結果をまとめると、次のようなコミュニケーションの深化の過程が考えられる。まず第一に問題場面の発生である。この場合、問題というのは、課題を遂行している個人が、自分の知識とか習熟の不十分さを認識することであると言い換えてもよい。次の段階は、共同活動の共通座標の明確化である。それが、コミュニケーションの土台（方向づけ）の役を果たし、その上にコミュニケーションのすべての過程が構築される。次の段階は、コミュニケーションの螺旋状的展開である。そ

ここでは、コミュニケーションの参加者は交互にその立場を入れ替えながら、相互刺激、相互調節、相互修正、相互補完をくりかえす。その際、共通資源ともいふべき共通プログラムおよび共通方略が形成される。この心理的共通性の形成こそが、個人的遂行に比べて共同的遂行のほうが高い効率性を示す理由なのである。

ロモフのこのような見解が西側の研究者から注目されたのは、ソ連とアメリカの研究者のコミュニケーションと認識過程を巡る合同シンポジウムの記録である Strickland, L. H. (Ed.) *Soviet and western perspectives in social psychology*, Pergamon Press という本が1979年に出版されていることからわかります。

このコミュニケーション研究の影響は、わが国へも浸透していて、たとえば、三宅なほみの「文化・社会の中での学習」(波多野誼余夫編『認知心理学講座四』東京大学出版会, 1982年)のなかでは、次のような研究が紹介されています。

まず、三宅自身の研究ですが、共同条件の下で二人の被験者に「ミシンの縫い目はどうやってできるか」という問題を解かせたときに、よくわかっているときには視点が変動しないのに、わからなくなったときには視点が頻繁に移動すること、しかも、理解水準が深まるにつれて視点の変動も増加するということが報告されています。さらに、共同条件の優れている点は、他人の異なる経験的知識が各自の構築した新しい知識構造に対して妥当性のチェックとして働く点にあるとして、共同条件におけるモニタリング機能あるいはチェック機能の存在を指摘しています。

また、ブルシリンスキーは、物理の問題を解くときの単独条件と二人一組の共同条件の場合の過程を比較して、①問題を解く過程で観察される困難点は両条件に差はなく、基本的認知プロセスに差はない、②共同群では問題の事象をいろいろな観点から見るチャンスが多くなる、と考えています。

さらに、ポノマレフは、「九つの点を一筆で書ける四本の直線でつなげ」という図形パズル課題解決において、共同群のほうに正解に達した組が多かった理由として次のように考えています。解決過程には、①課題そのものを解こうとするプロセスのレベルと、②解決プロセスそのものに対して働きかけるモニタリングプロセスのレベルの二つがあり、共同群では第二のレベルのプロセスがより多く観察された。

3-2 新ヴィゴツキー派の展開

すでに触れたように、活動理論は、20世紀後半も半ばを過ぎた頃になると、ソ連を飛び越えて、当時の西側世界、特にアメリカ合衆国、西欧へと進出していきました。その際、とりわけ大きな役割を果たしたのが、1978年にアメリカのハーバード大学出版局から出版された、ヴィゴツキーの論文を英訳し、一冊の本として出版した『社会における心』

(Cole, M. (Eds.) *Mind in society: the development of higher psychological processes*) であつたと思います。それまで、アメリカにおいてはヴィゴツキーの論文、著書の紹介はほとんどなされず、わずかに『思考と言語』が翻訳出版されてい

たぐらいでした。しかも、その訳文には誤訳も多くてきわめて評判のよろしくないものであつたようです。この事情が変化したのは、二人のアメリカ人研究者の功績が大です。それは、コールとワーチという認知心理学研究者です。彼らは、アメリカで大学院を終えた後、ソ連へと留学し、そこでヴィゴツキーの心理学やルリヤの心理学を学んでアメリカへと持ち帰ったのです。彼らの後につづいたのが、ロゴフやレイブ、ウエンガーたちでした。以下のところでは、彼らの代表的な研究について紹介しておきます。

コールの第5次元プログラム (Cole, M. *Socio-cultural-historical psychology : some general remarks and a proposal for a new kind of cultural-genetic methodology*. In J. V. Wertsch, P. Del Rio, & A. Alvarez (Eds.) *Sociocultural studies of mind*. New York: Cambridge University Press, 1995, 187-214.) は、地域の社会教育の一環として子どもたちにコンピューターの操作を学ばせるという試みです。コールはこの社会教育実践をおこなう環境を二つ設定して、同じプログラムでありながら、その環境によって効果がどのように異なるのかを比較しています。実験場所として選ばれたのは、サンジェゴ郊外の少年・少女クラブと図書館です。ここに、放課後、小学生たちがコンピューターの習得のために集まってきて、ゲームを通してコンピューターの操作を学習します。その小学生たちを指導するために、大学生が派遣されてきて、子どもたちの援助をするのです。

ただ、この二つの会場は、活動の組織の仕方、目的、雰囲気などの点において異なっていました。第一に社会的凝集性の密度の違いです。図書館のほうが、参加している子どもと子どもの間および大学生と子どもとの間の相互作用の密度、連続性、安定性が高かったのです。そのために、知識の蓄積と伝達が能率よくおこなわれることになりました。第二に、図書館のほうは、子どもたちの間に共同して学習をしようという雰囲気と熱心さがありました。これに対して、少年・少女クラブでは、子どもたちはかなり自由放任のままに放置されていて、出席率なども低かったのです。このために、一年間にわたる追跡調査の結果は、少年・少女クラブではコンピューター習得の成績の伸びが見られず、また途中で辞めてしまう子どもも多かったのです。反対に、図書館のほうでは、中退者は少なく、成績は順調に伸びていきました。

コールは以上の結果を、この学習の成否の差は子どもの属する集団の特性に原因があると考えています。さらに、コンピューターの習得に使用されたゲームは、論理的なものであるために、少年・少女クラブの集団に見られる自由放任的な集団ルールとコンピューター操作の論理的ルールとは相容れないのではないかと考えています。むしろ逆に、少年・少女クラブでは学習内容と集団の在り方が矛盾するのではないかと、そのために学習効果において違いが出てきたのではないかと彼は主張しています。

コールは、以上のようなプログラムを実施するなかで、菜園としての学習の文化モデル (culture as garden metaphor)

を提唱しています。一人の子どもがコンピューターの操作を習得するという学習活動も、それを取り巻く環境(たとえば、会場の雰囲気や経営方針、教師の対応の仕方、地域の資金援助の状況、地域や国の教育方針など)によって、幾重にも規制を受けているわけですが、それをちょうど文化(culture)の原義が耕作であるということと重ね合わせて菜園モデルを提案しているわけです。

ワーチ(Wertsch, J. V. & Minick, N. Negotiating sense in the zone of proximal development. In M. Schwebel, C. A. Maher, & M. S. Fogley (Eds.) Promoting cognitive growth over the life span. Lawrence Erlbaum Associates, 1990, 71-88.)は、この論文の中で、最近接発達領域における科学的概念と生活的概念の間の対話としての授業、あるいは両概念の織り合わされるものとしての授業という見解を展開しています。

教室場面における教師と生徒との対話は科学的概念と生活的概念との衝突であるとワーチは言います。そこでは、教師は、科学的概念を保持しながら、生活的概念の保持者である生徒との対話を通じて生徒を科学的概念へと高めていくことが要求されています。

このとき、教師のとるべき方略には三つあります。第一に、生徒が理解できるレベルにまで課題を変形させて、教師と生徒との間のコミュニケーションを可能にすること。すなわち、教師は生活的概念のレベルにまで降りることがまず必要です。第二に、生徒が生活的概念の次元から科学的概念の次元へと飛躍できるように励ますこと。すなわち、生活的概念にとどまらずに科学的概念へと組み直しをさせること。第三に、生徒の自発性を尊重し責任を持たせること。これは、生徒の意欲を損なわないで、しかも生徒とのコミュニケーションを断つことなく授業を展開することに通じると言っています。

ロゴフ(Rogoff, B. Observing sociocultural activity on three planes: participatory appropriation, guided participation, and apprenticeship. In J. V. Wertsch, P. Del Rio, & A. Alvarez (Eds.) Sociocultural studies of mind. New York: Cambridge University Press, 1995, 139-164.)は、共同体型(参加型)学習モデルを提出しています。それは、従来の学習心理学という個人の中の頭の中だけで行われる学習モデルを排して、共同体の活動の文脈の中で学習が行われるというモデルです。それを共同体の水準で見れば「徒弟制」という制度であり、個人と個人との相互作用の水準で見れば「導かれながらの参加」であり、個人の高水準で見れば「アプロプリエーション」です。ここで、「導かれながらの参加」という概念は、ヴィゴツキーの「最近接発達領域」と同義であり、「アプロプリエーション」とは、英語の意味では、「他人の所有物を自分の所有物にすること」ですが、レオンチェフのいわゆる文化遺産の「剥奪」に対応していると考えられます。

レイブとウェンガー(レイブ&ウェンガー、佐伯胖(訳)『状況に埋め込まれた学習: 正統的周辺参加』産業図書、1993年)が正統的周辺参加という概念を考えたのは、レイブがリベリアの仕立屋の徒弟の修業を観察したことが発端であると

されています。それは、仕立屋の親方のところに入門した徒弟は、特別に親方から講義を受けるわけでもなく、また教えられもしないのですが、最初は失敗してもいいボタン付けから始めてほしいにより難しくより重要な仕事を任されている、結果として最終的には親方の技術をすっかりマスターしてしまうというプロセスです。その間、ほとんどの学習が見よう見まねの観察学習であり、とりたてて親方から徒弟への教育というものはほとんどなされません。このレイブとウェンガーの正統的周辺参加という概念は、学習し能力を伸ばし、さらに人格的にも成長していく過程であり、同時にそれは組織内において自己のアイデンティティを確立していく過程でもあります。

4 ピアジェ派と活動理論の統合の動き

ピアジェ派、別名ジュネーブ学派とも言いますが、の研究の中で心の形成における社会の役割がよく現れてくるのは、ピアジェの弟子たちが、ヴィゴツキーの最近接発達領域という概念を導入しておこなった実験です。最近接発達領域とは、子どもの知能水準が、他の人間との相互交渉の結果として引き上げられる、その伸びしろの領域のことを言います。他の人間とは、友達、先生、兄弟姉妹、両親などですが、一般には子どもよりも知能の点でより進んでいる他者です。この最近接発達領域という概念は、社会が人間を形成するというメカニズムを考える上で最も重要な概念であると思います。後ほど触れたいと思っているのですが、ヴィゴツキー派心理学とピアジェ派心理学はこの最近接発達領域という概念を通して統合されるというのが私の考えなのです。私は、この点に注目したピアジェ派の研究者のアイデアに敬意を払うものです。そこで、ここでは、一つの代表的な研究について触れておきます。

ペレ・クレルモン(Perret-Clermon, A. N. Social interaction and cognitive development in children. London: Academic Press, 1980)は、5歳6カ月から7歳5カ月の100人の子どもを対象にして、ピーカー、コップ、ジュースの入っているピンを用いた保存実験をおこないました。プリテストによって、子どもを非保存者、中間、保存者の3つのグループに分けます。プリテストの直後に、実験群では集団セッションを10分間与えます。統制群にはこのセッションは与えられません。集団セッションとは、3人1組(内訳は、保存者2人と非保存者1人)にして、非保存者が3人の前に置いてあるコップに等量のジュースを注ぐことです。当然、3人は相談しながら、全員が納得して同意することを条件におこないます。この集団セッションの後、プリテストと同じ保存課題を用いて、1週間後にポストテスト1、それからさらに1ヵ月後にポストテスト2をおこない、保存の獲得という面で進展があったか否かを調べます。

集団セッションを与えられた実験群では、非保存者が保存者へと上昇する割合が統制群よりも大きく、しかも保存ができていない他の子どもの言わなかった理由付けを述べて、その

理由を説明したのです。これを根拠にして、ペレークレルモンは、この変化は模倣とか社会的学習で説明するよりも、子どもの内部で認知構造の再構造化が進展した結果である主張しています。集団セッションでおこなわれた社会的相互作用が、最近接発達領域内で働き、再構造化のプロセスを刺激し解発したというわけです。

さて、ここで、ピアジェ派と活動理論の統合を問題とするときにぜひとも触れておかなければならないのはチャップマンの認識の三項関係モデル (Chapman, M. The epistemic triangle : Operative and communicative components of cognitive competence. In M. Chandler & M. Chapman (Eds.) Criteria for competence. Lawrence Erlbaum Associates, 1991, 209-228.) です。

彼の言う「認識の三項関係」とは、能動的主体と知識の対象の間、および対話者と知識の対象の間には操作的相互作用が存在するし、能動的主体と対話者との間にはコミュニケーションの相互作用が存在する。この三項関係図式が7, 8歳を境目にして全体としてまるごと子どものなかに内化されるとするのです。すなわち、ピアジェの知能の発達段階区分で言えば、前操作期から具体的操作期にかけての移行期において内化されるとするのです。

ところで、チャップマンは彼の図式が内化されるのを説明するのに最適のモデルとして、ヴィゴツキーの弟子であるガリペリンの知的行為の多段階形成理論を持ち出してきました。

ガリペリンの知的行為の多段階形成理論は、次のような5段階から構成されています。①準備的段階 (定位的基礎の形成)、②外的、対象的行為の形成の段階、③外言の段階、④つぶやき (外言から内言への移行) の段階、⑤内言 (内的行為) の段階です。

この五段階を、幾何の垂直という概念の形成過程によって具体的に説明してみると次のようになります。

①の段階では、行為の目的が知らされ、垂直という概念がどのようなものであるかが説明され、次の段階 (②の段階) で用いられる補助カードの使用法や、定規の使い方が説明されます。

②の段階では、垂直かどうかを判別するための三枚の補助カード (それぞれのカードには次のように書いてある。Ⅰには「二本の直線があり、直角であれば垂直」、Ⅱには「二本の直線があり、直角でなければ垂直ではない」、Ⅲには「二本の直線があり直角かどうかわからなければ垂直か垂直でないかはわからない」。) の記述を参照しながら、実際に定規を用いて外的行為として垂直概念を確かめてみます。

③の段階では、カードと定規は片づけられて学習者の目の前にはもはや存在しません。学習者は、垂直かどうかを判別する規則を口で言いながら行為をおこないます。

④の段階では、前の段階 (③の段階) が正しくできるようになった後に、学習者は外言をつぶやきやひとりごとの水準へと移行させていきます。

⑤の段階では、行為は外的行為としてはもはやおこなわれなくなり、内的な観念的なものとしてのみ内言によっておこ

なわれるようになります。

チャップマンは、ガリペリンの以上のような知的行為の多段階形成理論で一番大事なところは、段階②から段階③へと移るところだと考えます。すなわち、外的行為が言語の平面へと移行するところです。それはなぜ重要かという点、段階②で主体は対象に対して直接に働きかけ、それによって対象の本質的な特徴や関係に注意を払うことが可能となります。すると、対象についてのイメージをつくり出すことが可能となります。そこで、次の段階で、外言を介してそれらのイメージと言語を結びつけることによりイメージは安定した堅固なイメージとして学習者の中に固定され、同時に対象の本質的な特質や関係についての意識や自覚が作り出されることとなります。

また、この外言の段階では、学習者が自分の目の前にいる他人 (この場合は実験者という大人) にも聞こえる形で判断基準であるとか自分の考えなどを述べるわけですが、そうすることによって他人にもわかる形で十分に展開された形で、正確に表現することが必要になります。このように、他人とのコミュニケーションの必要性という社会的圧力の下で、学習者は対象の本質についての言語化をおこなうことにより、その後の段階④、段階⑤で形成されていく意識に社会性もたらされることとなります。

チャップマンは、上に見たような過程を経て操作的相互作用とコミュニケーションの相互作用が全体として7, 8歳ころに内化されることにより、真の意味での自覚あるいは意識が生まれると考えています。

5 ルリヤの中央アジア調査

ここまで、活動理論がソ連を飛び出して西側世界へと拡がっていった様子を見てきたわけですが、ヴィゴツキーの弟子であるルリヤがおこなった中央アジア調査は、活動理論をベースとするその他の研究とは異なる質を持った調査ではないかと私は考えています。この調査は、ヴィゴツキーがまだ健在であった1931年と1932年に中央アジアのウズベキスタンとキルギスでおこなわれたものです。その後、まもなくしてヴィゴツキーは亡くなりました。では、彼らはどのような調査をしたのでしょうか。

調査地域は、農業と牧畜を主とする中央アジアです。宗教はイスラム教で、封建制が色濃く残っている地域ですが、ロシア革命の後、農地は解放され、社会主義建設が急速に進行したのですが、いまだ学校教育の普及も不十分なために、読み書きのできない人たちが圧倒的多数を占めるような地域です。そのような地域から、調査対象者として5つのグループが選ばれました。

第1のグループは、イスラム教文化圏に特有の女性専用の部屋 (イチカリ) で生活している女性のグループです。彼女たちは、読み書きができないし、いかなる社会生活にも参加していません。

第2のグループは、個人的生産経営に従事する農夫で、読

み書きができないし、社会的形式の労働へは参加していません。

第3のグループは、幼稚園教師養成のための短期講習会を聴講している女性たちで、教育程度は多少の読み書きができる程度です。

第4のグループは、コルホーズの活動家たちで、集団的生産経営に幹部として参加している人たちです。しかし、教育程度は多少の読み書きができる程度です。

第5のグループは、師範学校に入学している女性たちです。学校に2、3年は通っていて、読み書きは、他のグループに比べればよくできますが、教育程度はそんなに高いというわけではありません。

以上の5つのグループの特徴は、第1グループから第5グループに上がるにしたがって、言語教育の水準が高くなっていること、および、集団的形式の生産労働に関わる程度が高くなっていることです。それに対応して、心理過程の様態も変化してくるというのがルリヤたちの仮説でした。すなわち、具体的・場面的・状況的に知覚したり、思考したりする段階から、抽象的・脱場面的・脱状況的に知覚したり思考したりする段階へと変化していくと考えたのです。

もう少し具体的に見ていくと、知覚の調査のところでは、次のような分類課題をさせています。30個ぐらいのさまざまな色の毛糸あるいは絹糸の巻き束を目の前に並べておいて、それらをいくつかのグループに分類するように指示する。下位グループほど具体的なものの名前によって分類する割合が高く、上位グループほど基本色による分類を行う者が多い。たとえば、下位グループほど、ざくろ色、あやめ色、たばこ色、けし色、子豚色などの具体物にそって分類する傾向が強いが、上位グループになれば、赤、黄、青、白などのカテゴリー的な色別に分類する割合が高い。このような傾向は、色の分類ばかりではなく、幾何学図形の分類においても見出されました。円とか、三角形、四角形などの図形を、似ているものは同じグループに分類しなさいという課題を与えた場合、下位グループほど、具体物、たとえば、皿、お守り、時計、月などと分類する傾向が強いが、上位グループほど、幾何学的カテゴリー(円、三角形、四角形など)により分類する傾向が高くなったのです。

思考の調査では、「抽象と一般化」の調査から具体例を紹介しておきます。被験者には、4個の事物が描かれたカードを見せて、4個の事物のうちの3個は同じグループに分けることができるが、一つだけ仲間はずれがあることを指摘して、それがどれかを答えさせます。たとえば、「ハンマー・のこぎり・丸太・おの」の4つの事物を見せた場合、丸太だけが仲間はずれであるとして、その他の3つは道具というカテゴリーでくることができるとするような判断は、上位グループでは多いが、下位グループでは少ない。下位グループでは、この例にある4つのものは、丸太を切るときにハンマーとのこぎりとおのはすべて使うので一つだけを切り離すことができないという答えが多いのです。

また自己意識に関しても、三つの発展段階があることが示

されました。この自己意識のインタビュー調査は、被験者に対して、自分自身をどのように評価するか、他人と自分はどこが異なっているのか、自分自身のどのような長所や短所に気づいているのか、などの質問を課することから構成されています。

まず第一段階は、自分の性格の長所や短所を述べることを拒むか、あるいは問題を自分たちの生活の具体的、物質的事実の記述(たとえば衣服や住居の欠乏など)にすりかえてしまうというようなケースです。

第二段階前半は、集団的労働に参加して他人の行動を観察し、そして自己の行動も他人により評価されることによって、自己分析のしかたが他人の言葉による自己の外的行動の記述へと移ります。第二段階後半は、前半の特徴がますます強まり、集団の社会的行動規範とそれに基づく理想的自己像とを比較して自分の特質を評価するという特徴が見られるようになります。しかし、この段階でも内面的特質の記述よりも行動や日常生活場面の記述のほうが優勢です。

第三段階では、自分自身の内面的な心理学的特質の分析が、容易におこなわれるようになります。

以上のように、自己意識の変遷は、初めは外的属性に基づいた物的叙述が主であったものが、次第に自己の外的行動の叙述へと変化し、最終的には自己の内面的な心理学的特質の叙述へと進んでいきます。

中央アジア調査の以上のような結果から、ルリヤは言語教育の水準が上がれば、そして集団的形式の社会的活動に参加する度合いが上がれば、それに応じて脱場面的・脱状況的で抽象的な知覚や思考が優勢になってくることを主張したのです。これは、言語を獲得することによって、心理活動の形式も低次心理過程から高次心理過程へと飛躍するというヴィゴツキーの考えに沿った見解でもあります。

この調査が活動理論の歴史から見てきわめて重要であると私の考える理由は、社会における意識の発生という問題を考えるときに、史的唯物論の下部構造(土台)と上部構造の関係に対して、ぜひとも検討しておかねばならない問題を提起しているからです。

ルリヤは、フランス社会学派(たとえばデュルケム)は、個人の意識は社会により決定されると主張しながら、社会を経済機構、社会的実践としてとらえなかったという欠陥もっていたと批判しています。要するに、フランス社会学派は史的唯物論とは無縁のところ意識の発生を研究していたと批判しているのです。一方、ルリヤは意識の発生の下部構造として、言語を含む社会的実践を考えているようです。このとき、社会的実践を生活形式あるいは能動的活動と同義とみなしています。そのために、具体的には、道具の体系、事物の体系、社会関係の体系、言語の体系の四つから構成されると考えています。

ところで、この点に関しては、エストニア出身のヴィゴツキー派の心理学者、ピーター・トゥルビステが、「文化心理学における説明概念としての活動」という論文(Tulviste, P. Activity as an explanatory principle in cultural

psychology. In S. Chaiklin, M. Hedegaard & U. J. Jensen (Eds.) *Activity theory and social practice*. 1999, 66-78.) の中で以下のような説明をしているので紹介しておきます。それによれば、ルリヤの中央アジア調査の結果は、レオンチェフの活動概念(レオンチェフ『活動と意識と人格』西村学・黒田直美(訳), 明治図書, 1980)によって最もよく説明がつく。ルリヤの調査結果は、人間の意識は、能動的な生活過程、換言すれば、能動的な活動過程により決定されることを示した点にある。ルリヤはこの生活過程あるいは活動過程は、道具のシステム(労働)、事物のシステム(文化)、社会関係のシステム(活動の集団的形態)、言語のシステム(教育)から構成されると考えているが、実際の説明に用いているのは、その中の言語のシステムと社会関係のシステムである。具体的には、言語教育の水準の高低、社会的活動の形態(集団的か孤立的か)と、意識の水準(抽象的・範疇的意識か具体的・場面的意識か)が関連していることを実証した。

これが、レオンチェフの見解に一致している理由は、レオンチェフによれば、心は周囲からの刺激により決定されるのではなく、社会的存在条件により決定されると考えるからである。この場合の社会的存在条件というのは、人間の現実的な生活過程のことである。また、人間の現実的な生活過程とは、生産における活動の総体であり活動のシステムである。そして、この活動の中で、物質は意識へと変換される。

さらに、トゥルビステは、アメリカの新ヴィゴツキー派の研究者たち、コール、スクリプナー、サックスなどは、活動を単に文脈という意味に使用していて、レオンチェフが定義していたようには活動を使用していないと批判する。トゥルビステによれば、意識は、どのような活動をしているかということによって、あるいはどのような言語的意味システムを使用しているのかによって決定される。そして、トゥルビステは、活動の種類と意味の種類とをあわせて文化のタイプと定義して、意識は文化のタイプによって決定されると考える。意識は、自然によってではなく、文化によって決定される。これが文化心理学だというわけです。

さらに、ワーチとの共著論文「ヴィゴツキーと今日の発達心理学」(Wertsch, J. V. & Tulviste, P. L. S. Vygotsky and contemporary developmental psychology. In H. Daniels (ed.) *An introduction to Vygotsky*. Routledge, 1996, 53-74.) の中では、このような立場をサピア・ウオーフの言語相対性仮説になぞらえて、活動相対性仮説と呼んでいます。すなわち、活動の種類が異なれば意識の種類も異なるというわけです。

ところが、このような見解に対しては、はたして活動が、あるいはトゥルビステの言う活動と意味の複合体である文化が、意識の下部構造であるのかという疑問が出てくるのです。それが、エルハンモウミによって鋭く指摘されている点です。

エルハンモウミ (Elhannoumi, M. Lost—or merely domesticated? The boom in socio-historicocultural theory emphasizes some concepts, overlooks others. In S. Chaiklin (ed.) *The theory and practice of cultural-historical psychology*, 2001, 200-217.

Elhannoumi, M. To create psychology's own capital. *Journal for the theory of social behaviour*, 2002, 32, 89-104.) は、心理学研究においては史的唯物論、とりわけ社会的生産関係が中核に置かれなくてはならないことを強調して、現在のヴィゴツキー研究の弱点は、次の3点であると指摘しています。

①道具、記号、言語、言語行為、最近接発達領域などが取り上げられ、社会的生産関係が無視されている。

②真の意味でヴィゴツキーを理解しようとすれば、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』、『経済学批判要綱』、『資本論』の見解へと立ち返らねばならない。特にアメリカでは、ヴィゴツキーの心理学からマルクス主義的要素を抜き去ることを良しとしてきたという経過があるので、ことさらこのことが重要になってくる。

③ヴィゴツキーの心理学において社会的生産関係という概念が誤まって解釈されてきたことが彼の思想をゆがめてきた。

このように、エルハンモウミは、社会的生産関係こそが重要であると強調して、トゥルビステの言う文化あるいは活動を意識の下部構造とみなすという立場は間違っていると主張しているのです。

6 戸坂潤のイデオロギー論

この問題を考える上で、戸坂潤のイデオロギー論はきわめて示唆的であり、エルハンモウミの議論をさらに徹底させたものであると思います。戸坂は、人間の心理も一つのイデオロギーであり、イデオロギーあるいは意識の根底をなす社会の物質的地盤は、物質的生産力であり、物質的生産関係である。特に、物質的生産関係、すなわち階級関係が根底であり、階級関係を捨象したイデオロギー論、意識論はありえないという立場を鮮明にしています。

このように考えてくると、ルリヤやレオンチェフ、トゥルビステ、ワーチなどの場合は明らかに、社会の下部構造は活動であるとは言っても階級関係までは貫通しておらず、言語を含む活動の段階にとどまっています。さらに、活動と生産とはどう異なるのかと言う点も不明確です。このことが、エルハンモウミも指摘しているように彼らの不十分なところではないでしょうか。それは、ちょうど、戸坂が和辻哲郎の「風土」という概念を、和辻は史的唯物論を批判するために「風土」という概念を作り出したと批判していますが、この和辻の「風土」とトゥルビステの「文化」という概念は、生産関係、階級関係にまで貫通していないという点において、共通の欠陥を持っているのではないかという疑問が出てくるのです(戸坂潤「和辻博士・風土・日本」、戸坂潤全集第5巻「世界の一環としての日本」所収、1967年)。

戸坂によれば、和辻の「風土」は、自然そのものという物質的概念ではなくて、むしろ人間学的に解釈された自然である。すなわち観念である。風土が異なれば、意識や行動様式も異なるという和辻の説は、上に見たトゥルビステとワーチの活動相対性仮説を風土相対性仮説(しかもイデアとしての

風土)に置き換えたものなのではないでしょうか。

ところで、戸坂の主張は、最近の日本の政治状況の具体例に沿って検討してみると、なるほどと合点がいくところが多いのです。現在(2012年6月)、わが国では消費税の問題と原発をどうするかという問題が政治の大きな焦点となっています。私が日ごろ感じているのは、日本の総理大臣(この論文の執筆当時の総理大臣は、野田佳彦氏)がなぜ、これほど国民が反対しているのに消費税の増税と原発の再稼動にこだわり続けるのかという点です。総理大臣就任当時は、「どじょう内閣」と自ら命名して庶民の立場に立つようなイメージを与えていたのではないのでしょうか。わたしは、彼がこれほど増税と再稼動に固執するのは、問題の本質がよく理解できていないのか、あるいは本当はそうではないことをわかっていながら、どこかにやましさをかかえながら主張しているのかのどちらかではないかと思っていました。しかし、戸坂のイデオロギー論を勉強してみると、そうではなくて、野田氏は、心の底から、増税と再稼動が100%正しいと思っていて、いささかも疑っていないと判断せざるを得ないと確信するに至りました。彼は、消費税増税と原発再稼動こそが真理であると確信しているのです。その理由は、彼が、明らかに、生産関係で言えば、資本家の側に立っているからです。米倉経団連会長が、彼を称して、前の首相(菅直人氏)とは頭から上のできが違うと公言するはず。「どじょう内閣」というキャッチフレーズ(もともと最近はまったくそのような言葉さえ出てきませんが)は速やかに返上して、「金のしゃちほこ内閣」へと変更したほうがふさわしいとまで考えざるをえません。このように、戸坂のイデオロギー論は、階級関係が意識の論理まで貫くことを鮮明にした点で、きわめて優れた主張であると思います。

それでは、ルリヤの中央アジア調査の立場は、戸坂の視点から見たときどうなるのでしょうか。ルリヤは文章として記述している範囲においては、生産関係を社会の物質的地盤としての下部構造とみなしているように見えますが、実際の調査においては、言語の教育水準と社会関係(集团的 vs. 個人的)を下部構造とみなしています。要するに、肝心なところがどうもあいまいなのです。エルハンモウミが、アメリカでは、ヴィゴツキーの心理学からマルクス主義的要素(史的唯物論)を抜き去ることを良しとしてきたと断じていますが、ヴィゴツキー・ルリヤ学派においても、一応は史的唯物論を唱えていても実のところは、その内容についてはあまり深く理解していなかったのではないかという疑問が生じてくるのです。

7 残された課題

以上、述べてきたところから、活動理論の残された課題は、意識の発生の下部構造は何かということを明確に定めることなのではないかと思います。ルリヤの場合は活動、実践、生活様式、言語などがその候補に挙げられているのですが、生産力、生産関係はどこに行ったのでしょうか。

また、そもそも、活動理論という名称でいいのでしょうか。活動理論というと、誰が考えても活動が下部構造でその上部構造として意識があると考えてしまいます。さらに、「労働」とか「生産」という言葉を使用しないで、なぜ「活動」という言葉を使用したのでしょうか。行動主義心理学の「行動」概念に対抗するために、人間の能動性を意図して「活動」ということばを使用したということは一般に言われていることで、その点では納得できるのですが、「活動理論」とした時点で、すでにあいまいさが挿入されたのではないのでしょうか。そもそも、ヴィゴツキーは、心のありかには魂の奥底にも神経細胞の中にもなくて社会の中にある、と主張したのですが、むしろ、心は物質的生产力と物質的生产関係によって決定されると直截に論じたほうがわれわれにとっては理解しやすかったのではないのでしょうか。

このあたりの論点が、今後の活動理論の発展にとっての残された課題として研究者の前に提示されているのではないのでしょうか。